
I love you...

sachi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I love you...

【Nコード】

N33060

【作者名】

sachi

【あらすじ】

戦国時代。

主人公のチエと武士・シヨウの

歴史に刻まれなかった切ない恋物語です。

最後まで読んでいただけると嬉しいです。

章の更新はたまにはなりますが、

一生懸命きつと素敵な小説に仕上げて

参りますので、

応援よろしくお願いします（＾Ｏ＾）

我が自慢のお姫さま

緑が広がる美しい森。

そこに清らかに流れている川。

そよぐ風は何かをささやいているようだ。

心がやすらぐこの場所で、白馬を連れて美しい少女が現れた。

西条村の殿・ユウサクの娘、チエ姫である。

毎日ここへ来て、何かを想っているようだ。

鳥もチエを好み、チエの指に乗り、歌をさえずっている。

「おまえは…本当に綺麗な声だな…。」

鳥にそうささやき、何か切ない顔をした。

チエを乗せた白馬も、鳥とじゃれあっていた。

「姫さま!!!!」

遠くからチエを呼ぶ少年。

チエの幼馴染でもある、武士のショウである。

「ショウ?!」

「姫さま! そろそろお戻りください。ユウサク様がお怒りになりますよ。」

「もう見つかったのか?」

「見つかったって…もしかして、抜け出したのですか?」

「ここに行きすぎるって、うるさいからな。」

「最近、のぼせりが多いので…」

「じゃあ、シヨウお前がこれからは付き添え。昔のように…。」

切ない顔をしてほほ笑むチエを見て、シヨウは言葉を失った。
二人は懐かしそうな過去を想い浮かべた…。

長い長い沈黙が続く。

聞こえるのは鳥のさえずりと流れる川の音だ。

シヨウが二人の沈黙を破った。

「行きたいときは、いつでもおっしゃってくださいね…。」

優しいほほ笑みを浮かべてそうささやいた。

その笑顔に安心してのか、チエもほほ笑み返してうなずいた。

「さあ、戻りましょう！」

白馬を呼び、姫を乗せて城へ戻った。

西条村。チエやシヨウ達が生まれ育った土地。

ユウサクや住民も争いごとを嫌い、思いやりのある心を持っている。

そして、西条城。

お世話係のミヤノとランがチエの帰りを待っていた。

シヨウがチエを連れていたので、安心した。

「チエ姫！シヨウ様！おかえりなさいませ！」

「また抜け出しておったのかチエ！」

ユウサクが怒り気味に言った。

「ユウサク様！私が一緒にいましたので、心配はございません。」

「シヨウと一緒にいたのか…。それは良かったものの、これからは一言伝えなさい。」

「すまぬ…。」

「シヨウ、すまなかったな。下がってよい。」

「はい、おやすみなさいませ。」

シヨウは二人に深く頭を垂れて下がった。

チエはかえっていくシヨウの姿が見えなくなるまでずっと見つめていた。

「姫さま！お風呂に入りましょう。」

ランに声をかけられ、チエも移動した。

そしてお風呂から出た後。

「ミヤノ！明日アサミを城へ連れてきてくれ！」

「かしこまりました。」

アサミは普通の村人だが、チエの幼馴染、親友である。
明るくて元気な少女で、走ることが大好きなのだ。

「おやすみなさいませ。姫様。」

「ああ。おやすみ。」

チエはすぐに布団の中に入らず、窓の外の満月を眺めていた。

「シヨウ…あなたの心は満月のように欠けておらぬ…。」

そうつぶやき、頬を涙でつたわせた。

武士が秘める想い。

西条西村。

シヨウが住んでいる場所だ。

「シヨウ！お疲れ！」

声をかけたのは、隣に住むシヨウの親友。

武士をやっているユウである。

「ああ、ユウ。そっちこそお疲れさん♪」

「また、わがまま姫様のお世話をしていたのか？」

「まあな…。」

「大変だな…。」

「せっかくユウサク様が俺を拾ってくれたんだ。恩返しもしないとい。…」

「そっか…。あ、シヨウ、お前…！」

「ん？」

ユウはいったん言うことを止めて、考え…

「いや、何でもない。明日も頑張ろうぜ！」

「ああ、いつ戦が起るか分からないし、体力つけておかないとな！」

「じゃ、おやすみ！」

「おやすみ」

ユウが言いかけたことが気になったが、あえて聞かなかった。

ユウと別れ、シヨウは一息ついて家に戻り、夕飯を作りながら物思

いにふけていた。

シヨウの両親はシヨウが幼いころに亡くなっている。

父もかつて武士だったが、戦で命を落とした。

母は病で。兄も一人いたが、父と一緒に戦死した。

一人になってしまったシヨウを、ユウサクがシヨウを西条軍の武士として雇ったのだ。

両親が生きていた頃、ユウサク達と仲が良かったので、年が同じチエとシヨウをよく一緒に遊ばせていた。

二人は毎日のように西条の森へ遊びに行っていた。

シヨウはずっと一緒にいるうちに、チエに熱い感情を抱いてしまった。

しかし、この時代は身分があり、姫と武士では結婚できない。

わかってはいるが、この想いは止められそうもないし、

誰にも打ち明けられるわけがない。

だから、この想いを胸にしまい込み、これだけは決めている。

「チエ姫は必ず守る」！！

それを決めたのは、武士になった歳の16になったときのこと。

剣術の練習に一生懸命、励み、心身共に成長させていった。

子どもの頃は、虫も殺さなかったシヨウが、戦になると多くの敵を殺めている。

シヨウのおかげで、戦には毎回勝利し、ユウサクやチエを守っていた。

しかし、シヨウは：どんどん綺麗になっていくチエを見て、どんどん離されていくような気がしてならない。

いつか、チエが自分以外の男と結婚してしまうかもしれないと：。ずっと不安に駆られていた。

自分のしてやれることを、精一杯しようと気持ちを切り替えた。

明日も自分との勝負。

そして、チエに会えることを楽しみにしている。

心支える者達・・・

朝が来て、西条の森に住む鳥がチエに朝を知らせに来た。

「んう…。朝か？」

寝起きの声でつぶやいた。

外から、ミヤノの声が聞こえた。

「姫様。おはようございます。お食事の用意ができました。」
「ああ。今行く。」

チエの母、ユキがチエに話しかけた。

「チエ、今日の予定は？」

「今日はアサミと話してくる。」

「あら、アサミちゃんと！楽しんで来てね。」

「ああ。」

ユキは西条一穂やかな性格で、優しくて美人である。

チエはユキの美しい顔立ちの遺伝をもらい、性格は厳格なユウサクの父親譲りである。

母親であるユキは、チエがなにか元気がないようだと、心の中で感じていたが、あえて聞かないでいた。

西条北村。

アサミが住む場所だ。

「チエー！ー！！！」

北村中に響くほど、大きな声。

明るく元気なので、誰も憎めないが。

「アサミ…。今日も元気だな。」

「最近全然風邪ひいてないんだよ」

「バカは風邪ひかぬからな」

「誰がバカぞ！？」

アサミと一緒にいると、笑いが絶えない。

チエは、アサミの存在をなんとなくありがたく思っている。

「で、お話ってなあに？お姫様？？」

「ああ…。アサミ…誰にも言うなよ…。」

「もちろんだよ（＊＾＾＊）」

アサミは無邪気に笑ってチエが言う言葉を待っている。

チエはその笑顔を見て、安心したら、さっそく話し始めた。

「実はな…。」

「うんうん。」

「あたし…ショウを見るとなんかおかしいんだ…」

「おかしいって…？」

「なんか…胸が痛いっていうか…。病気なのかな…？」
「…。」

アサミは少し考え、間を取った。

「わかった！チエ、あんた…。」

「ん？」

チエに顔を近づけ、真顔でこう言った。

「シヨウのこと、好きなんじゃない？」

「え？」

チエの思考が一時停止した。

「（あたしがシヨウを…好き？）（）」

「チエ？？」

表情が変わったチエにアサミは納得した。

「やっぱりそうだよ。好きな人を見ると、胸が痛くなるんだよ。」

「う……。嘘……。」

「そうだよ……。チエ……。」

「でも……。シヨウは……。武士だ。」

アサミはチエの肩をつかんで言った。

「チエ!!!! 西条の姫が身分の壁を越えられないわけないでしょ!」

「アサミ……。」

「それに…シヨウは……。シヨウもね……。!」

アサミが言いかけたその時…。

「姫さま!!」

ミヤノが迎えにきた。

「アサミさま、お世話になっております。」

「ミヤノさん! どうも!」

「ユウサク様が、お呼びになられています。お戻りください。」

「ああ…。すまぬアサミ」

「ううん！またいつでもおいでよ！あ、またお団子よろしくね！」

「はいはい（ー！；）」

アサミは心の中でつぶやいた。

（チエ…。あたしはチエの味方だからね…。いつでも頼ってよ…。

あたしがいることを忘れないで…！！！！）

西条西村。

武士の訓練が終わり、シヨウはお風呂で汗を流した。

「シヨウ！！！！」

ユウが外からシヨウを呼んだ。

「話があるんだけど！！」

「話？ちょっと待って…。」

しばらくして、シヨが姿を現した。

「なんだ？ ユウ？ 話って…？」

「まず相談なんだけど…」

「うん？」

「俺最近ね・・・アサミ見たら胸の辺りが痛いんだよね…。病気だろっか」

「いんや、違うだろう。それはたぶん、ユウがアサミを好きだからだろう。」

今、
なんと？」

「アサミが好きなんだろ。」

「なんと？」

「好きなんだろ？」

[illegible]

ユウが叫びをあげた。

（鈍い奴だな）

少しほほ笑んで、こういった。

「好きな人ができると、胸は痛くなるんだよ…。」

その言葉を聞くと、ユウはニヤリと笑った。

「シヨウ…。もうひとつ聞くけどな…。」

「ん？」

「おまえ、チエ姫のこと好きだろう？」

「え??:??:?」

「シヨウもこういう話はわかりやすいな」

「はああああああ??:??:??:?」

凶星をさされ、こういう反応しかできなかった。

「大丈夫。誰にも言わないから。」

「ユウ…。」

少し苦笑いをし、またいつもの真顔に戻った。

「でもな…ユウ…お前らは同じ身分だからいいけど…俺のは…
叶っこない…」

「シヨウ…。おまえ、そんなので諦めるのかよ？」

「え？何言ってるんだ！！身分制度破ったらどうなると思って…！！」

「おまえみたいに立派な武士なら、ユウサク様なら、わかってくれるかもしれない。」

「で、でも…。」

「ほうよ。あたしもそう思う！シヨウ！頑張れ！！踏ん張りどきや
！」

「でもなあ…」

『って…え！？』

「アサミ！？」

シヨウとユウが声をそろえて言った。

「いつからいたんだ？」

ユウが声を震わせて言った。

「…ユウが間抜けな声を出してたところから。」

「は…セーフ…。」

「何がよ？」

「なんでもないよ！」

「どーせ、あたしの悪口言ってたんだろ！プン！」

アサミは冗談っぽく、意地悪っぽく言った。

ショウはユウにささやいた。

「素直になれ！ユウ！！」

「ショウ！これあたしの母さんがショウに夕食作ってくれた！
ユウは1個しか食べないでね。プンッ」

「~~~~~っつてアサミ！！！！」

ユウは走っていくアサミを追いかけた。

「…っ…速っ…!!」

荒くなっていく息。

なんとか距離を縮め、やっとのことでアサミの腕をつかみ、抱き込んだ。

「…!!??」

いきなり抱きしめられ、思考が止まるアサミ。

「ちょ…ユウ…!」

「アサミ…!!」

「やだ! 離して!!」

思い切りユウの肩を叩く。

「（（痛えな…）） アサミ…!! 好きだ!!」

「え!？」

「ずっと…好きだった!」

「嘘…!」

「嘘じゃない! アサミを想うと胸が痛くて…シヨウと話してたら…」

「……いや……」

二人は大声で笑った。

それを微笑ましく見ていたショウはクスクス笑っていた。
しかし、その数秒後にはため息が出た。

「すまんショウ、取り込みすぎた……」

必死にショウに謝るユウ。

「で、さっきの話の続きやろう！」
アサミが続けた。

「もういいよ俺のことは……」

「でもショウ……」

「俺は……どんな形でもいいから……。チエ姫のそばにいて……守ってやりたい……」

「ショウ……」

沈黙の後……アサミが言った。

「でも、シヨウ！気持ちは伝えたほうがいいよ！」

「アサミ…。」

「シヨウ！俺も同感だ！俺には素直になれって言ったのに、自分は黙ってるなんてずるいぞ！」

「ユウ……。そうだな……。。」

「ま、ゆっくり考えなよ！あたしは応援してる！」

「シヨウなら絶対いける！全然ダメになるまで、絶対心折れんなくて！」

「……。ありがとうな。」

親友の力強い言葉に、シヨウは元氣をもらった。

西条城。

ユウサクのところへ行く前に…。

チエがランに問いかけた。

「なあ、ラン…。」

「はい？」

「もしも…もしもの話よ？」

「ええ…。」

「もし、身分の違うものを好きになってしまったら…ランならどうする？」

ランは目を見開いた。

そして、ゆっくりほほ笑んで言った。

「私は…まず想いを相手に伝えることを先にします！そうしたら、どんな結果にしろ、後悔は残りませんから…。」

「…そう…か！そうだな。ありがとう。ラン！」

「いいえ！（何もしてないと思いますが…☆笑良かった）」

ランの言葉でチエは勢いづいた。

シヨウに想いを伝えよう！

支えてくれた人たちのおかげで、一歩前進のはずだった・・・。

止まらない想い。川。

チエはユウサクとユキコのいる部屋へと向かった。

「父上！母上！参ったぞ。」

「ああ来たか。」

「なんだ？話って……。」

「実はなチエ……。」

ユウサクは1本の巻物を取り出した。

「隣村の吉峰が……。」

（（ドクン……））

嫌な予感がチエの胸をよぎった。

「婚約の依頼が来た。」

「!!!」

チエは目を見開いた。

ついに聞きたくもない婚約の話が来てしまった。

外から聞いていたランも啞然とした。

ユキコは悲しそうな顔をして、こう言った。

「チエ、無理に結婚しろとは言わないけど…。断れば、戦になる可能性が高いのよ。だから、犠牲者を出したくないなら…。いい返事を待ってるわ…。」

「・・・!!!!」

ユウサクらと別れ、自分の部屋に戻った。

チエの体はまだガクガクと震えていた。

（（せっかく気持ちを伝えることを決めたのに…!!））

チエの決意と心はボロボロに崩れていった。

朝になり、ランがチエを起こしに来た。

「チエ様！チエ様！？」

名前を呼んでも返事はなく、ランはますます心配し、泣きそうになった。

「チエ様！失礼します…。」

そつとふすまを開けた。

「チ、チエ様?!」

開けた向こうには、泣き腫らした目をしたチエが茫然として座っていた。

「チエ様!大丈夫ですか!?!」

「ラン…。今、朝か…?」

「はい、…。チエ様、昨日のことで泣いていたのですか?」

「…。聞いてたのか?」

鋭い目をしてランを見た。

「す、すいません…。」

「よい。…。あたし…。どっちも嫌なんだ。」

「どっちも…。?」

「吉峰の息子はどんな奴かもわからないのに、結婚するのも嫌だし、あたしのわがままの為に、武士たちが命を落とすなんて…。そんなの…。嫌だ…。」

「チエ様…。」

ランは必死になって考えた。
たくさん考えた末、こう言った。

「チエ姫、吉峰様の息子様と会われたらいかがですか？」

「え．．．？」

「会って、どんな人か確かめて．．．それから決めたらいかがですか？ユウサク様の敵軍の人だと言えど、もしかしたら、息子様はい方かもしれませぬ！」

「．．．。」

チエは少し戸惑ったが、眉を少し寄せ、

「そうだな．．．。」

小さな声でそう言った。

「チエ様．．．。チエ様がお好きな人は．．．シヨウ様ですよね？」

「!?!?!?!」

ランに凶星をさされ、息を飲んだ。

「ど、どうして!?!」

「わかりますよ．．．あたしは、ずっと小さい頃から二人を見てい

ますもの……。」

「でも……シヨウは……武士だ……。」

ランにもこれだけはどうしようもなかった。

そこにミヤノの声が廊下に響いた。

「ラン、何してるの？朝食、もうできてるから、早く運んで！」

「あ、はい！……チエ様、行きましょう？」

「ああ……。」

ランはチエに食物を差し出した後、ミヤノに事情を話して急いで城を飛び出した。

西条西村。

「シヨウ様……！！」

外の井戸で顔を洗っていたシヨウは、周りを見渡した。

「ランさん！どうしたんですか？」

「ちょっと、頼みを聞いていただきたいのですが！」

「頼み……ですか？」

朝食を食べた後、チエはこれからどうしようかと思っていた。

時間が少し経った後、いつもの場所へ行こうかと思ったその時。

「シヨウに会いたい……。」

強く思った。

ランが戻った時、チエは駆け寄り、

「ラン！シヨウを呼んでくれ！」

「シヨウ様ですか？もう呼びましたよ……。」

「え……？」

「ゆっくり話してくださいね。」

ランがにっこりと微笑んだ。

「ありがとう……。」

チエも微笑みを作ってお礼を言った。

「ショウ!!」

「姫様!!」

「早く行くぞ!」

「はい・・・。」

チエを白馬に乗せて、ショウはそれを引っ張っていった。

二人は西条森につくまで、お互い話しかけず、ずっと黙っていた。

そして30分後、いつもの場所に着いた。

「姫様、着きましたよ。」

「ん・・・。」

静かに馬から降りて、流れる川のそばに行った。

シヨウはじっとチエの後ろ姿を見ていた。

鳥がチエの姿を見ると、すぐに飛んできて、チエの指に乗って歌をさえずっていた。

そんな情景をシヨウは見惚れていた。

鳥たちがしばらくして去ると、チエは振り向き、声をかけた。

「シヨウ、こっちへ来い。」

「あ、はい……。」

チエに近づくたびに、心臓の高鳴りが大きくなる。

その時……。

草むらの向こうから、ガサガサという音が聞こえてきた。

「!?!」

2人は振り向くと、その草むらから無愛想な数人の男たちが刀を持って歩み寄ってきた。

「金目のものを出せ。」

一人の男がチエに詰め寄った。

「ない!!」

チエが男をにらみながらそう言った。

男はその勢いに少し驚いたが、また不敵な笑みをした。

「ふん……こうなったら、少し痛い目に合ってもらおうぜ……。」

男が刀を振り上げた。

「・・・!!」

シヨウも刀を抜き、チエに振り下ろされた刀を受け止めた。

「な・・・!!」

シヨウは隙をついて男の刀をたたき落とした。

「だ、誰だ!? おまえは!?!」

「西条軍のシヨウだ。」

「さ、西条の・・・シヨウ!?!?」

「親分! かないっこないですぜ!?!」

「くそ・・・引き上げだ!?!」

男達は去っていった。

チエも、シヨウがこんなに強くなっていると思わなかったようだ。

のぼせりが名前を聞いただけで、逃げて行くなんて。

「チエ姫! お怪我は!?!」

「ない。ありがとう。」

「姫・・・あの・・・ランさんが、姫の話を聞いてほしいと言っておられたのですが、何か私に？」

「ああ・・・それか・・・。」

チエはまた下を向き、しかめた表情をした。

「姫・・・？」

「シヨウ・・・。」

切ない顔をしたチエにシヨウは・・・衝動に駆られた。

俺が姫を守ります

「・・・!？」

白馬が音に反応して、チエらを見た。

チエは後ろからショウに抱きしめられた。

「ショ・・・ショウ!？」

驚きのあまりに、チエの手が震えた。

ショウはチエの肩に顔を埋めた。

チエはショウの顔を見ると、ショウは真剣な顔をしていた。

どんどん抱きしめる力が強くなっていく。

チエもかなりの体力と腕力は持っているが、男性で武士のショウにはかなわなかった。

「ショウ・・・痛い・・・。」

我に返ったショウは、すぐさまチエから離れた。

「す、すいません・・・。」

チエは赤面してシヨウに背を向けた。

「シヨウ……。」

「はい……。」

「今日は話はない。」

「え……。」

「気持ちが悪く着いたら、いずれ話す。あなたにだけ……言いたいことがある。」

『あなたにだけ……』

シヨウは頬を赤に染めてうなずいた。

「はい……。」

「また、お前を呼ぶ。ちゃんと聞けよ。」

「はい……。」

「・・・！シヨ、シヨウ！血が！」

「え？ああ・・・。さっき刀の刃が少しかすったみたいですね・・・。
まあ、こんなのすぐ・・・。」

チエはシヨウの腕をつかみ、自分の着物の裾を食いちぎってシヨウの腕に巻きつけた。

「ひ、姫様！大丈夫ですから・・・。」

「動くな！・・・よし・・・。」

「すいません・・・。」

シヨウはさらに赤くなった。

すると、チエがささやいた。

「シヨウ・・・お前は幼いころ・・・よく傷を作っていたな・・・。
私の為に。」

（（ドキ・・・））

シヨウの鼓動が高鳴る。

幼いころの、あの頃によみがえる。

それは、10歳のころ。

「チエ姫!! ショウが・・・ショウが・・・。」

「ん? なぁに? ショウ?」

「ショウが・・・チエ姫を守ります!!」

「ショウ・・・うん!!」

満面の笑みを浮かべた。

（懐かしいな・・・。）

ショウは過去が今と重ねた。

「・・・ショウ・・・? 大丈夫か?」

「・・・あ・・・はい!

（いけね、ボーツとしてた。）」

「もう夕方だ・・・。帰るぞ。」

「はい・・・。」

いつの間にか時間だけ経っていた。

もう少し一緒にいたかった。

でも、また次のとき、一緒に来られるのを楽しみにしていた。

数週間後。

「ショウ!! おまえ気持ち伝えたのか!？」

ユウが興味津津に聞いてきた。

「え・・・それはまだ・・・。」

「何してるのよ!とろい!」

アサミがけなす。

「でも、のぼせりから守ったらしいな!やるじゃん!」

「そうなの!？それはほめる。」

「そうそうアサミ聞いて!こいつ衝動で姫を・・・。」

「うわあああ！ユウ黙れ！！」

「なんだよ本当のことだろう？」

「早く行ってユウ！！」

「姫を抱きしめたって！」

「ユウ・・・。」

シヨウは顔を赤らめ、思い切りユウをにらんだ。

「そう・・・やるじゃない。」

アサミはからかうことなく微笑んだ。

「アサミ・・・。」

シヨウはアサミは絶対からかってくると思っていたのに意外だった。

「シヨウ、ひとつ聞きたいことがあるんだけど・・・。」

「なに・・・？」

「チエにね、かっこつけて『守る』って言ったんだろ?」

「・・・かっこつけては余計だよ・・・。」

「(笑)」

ユウとアサミは意地悪っぽく笑った。

「でね、守るって・・・チエを『姫』として守るってこと? それとも、『女の子』として?」

「!!」

「どっち・・・？」

真顔でシヨウに詰め寄るアサミ。

こんな真面目な顔をするアサミは初めて見たのだ。

「俺・・・は・・・。」

西条の家臣、ケイが青ざめた顔をして、ユウサクのところへ駆けつけた。

「殿！大変でございます！滋賀の軍のものが攻めてきました！！」

「何!？」

「住民がせっかく育てた米の穂も、奴らに刈られてしまいました。」

「・・・手が込みすぎているな・・・。やむをえん・・・。追い払え！」

「はっ!!」

武士の仲間がシヨウとユウを呼びに来た。

「シヨウ！ユウ！戦だ！！準備しろ！！」

「は、はい！」

「でも、なんでいきなり！？」

シヨウが聞くと、

「さっき俺も聞いたばかりなんだが、滋賀の軍が来た理由は二つあったらしくて……。」

「二つ？！」

「一つは毎回のように、米の穂を刈って、村を奪いにくること。そして、戦に向こうが勝ったら、チエ姫をいただくことだそうだ。」

「……！！姫を！？」

「ああ、相手の殿は、あまり評判良くないし、姫をあんな奴には渡せぬ。絶対勝つぞ！」

「はい！！」

チエは戦が始まると聞き、急いで武士達のところへ駆けつけた。

「ユウ！ ショウはいるか？」

「姫！ ショウはあちらです。」

深く頭を垂れて言った。

「姫！？」

「ショウ！ これを……。」

チエは身につけていた石を外し、ショウの首にかけた。

「ひ、姫これは……？」

「おばあさまの形見で、小さい時から持たせてもらっているお守りだ。」

「い、いけません、こんな大切なもの……！」

「私の代わりにお供させてくれ。私の代わりに……お前を守る！」

「姫……。」

「必ず、生きて帰れ！ 勝つと思うな。負けなと思え！」

「はい!!」

シヨウはチエの手を握り、力強い返事をして、武士のところへ戻った。

「よおシヨウ!」

「いいなあ! 愛しの姫様にかわいがってもらえてよ☆」

武士の仲間にかかわれ、シヨウは顔を赤らめた。

「うるさい!」

「顔が赤いぞシヨウ!」

笑い声が響く。戦前にこれほど盛り上がらないはずだが。

一方、住民達は避難所に避難し、チエやラン達も避難した。

「まさか滋賀軍が襲ってくるなんてね……。」

アサミがしかめた顔をした。

「アサミ、窓をのぞかないほうがいい。発砲弾が飛んでくるかもしれない。」

「あ、うん！で、話だけど……。」

「あ、ああ……。ミヤノ、ラン、隣の部屋に戻れ。アサミと話をするから。」

「かしこまりました。」

ミヤノとランが部屋から出ると、アサミがみかんを取り出した。

「チエ、ミカンあげる！あたしの畑で採れたんだ！」

「……ありがとう。……。」

「……チエ？」

チエはみかんを受け取るとうつむいてしまった。

「チエ？どうした？」

「あ・・・サミい・・・」

チエの言葉は声になっておらず、青い瞳からは涙が溢れていた。

「チエ！？どうしたの！？どっか痛い？」

「アサミ～～！！」

「よ、よしよし・・・。」

チエはアサミの胸で大声で泣いた。

数時間後。

ホラ貝の音が鳴り響いた。

チエとアサミは眠りについていた。

「姫様、戦が終わりました。出られてくださいますか？」

ミヤノがふすまを開けた。

「ああ！アサミ！起きて！」

「んう……。」

「それで、どっちだ？どっちが勝った？」

「西条が圧倒的でした。刈り取られた稲はすべて返してくれたそうです。」

「そうか……。」

「チエ！シヨウ達のところへ行こう！」

「あ、ああ！」

走っていく二人を、ミヤノは悲しい顔をして見ていた。

戻ってくる武士達はくたびれた顔をして帰ってきた。
幸い死者は両軍とも出さなかったらしい。
しかし、重傷を負っている武士が多かった。

「シヨウ！」

「ああ、姫！」

「よく無事だったな！」

アサミが意地悪っぽく笑う。

「あ、そうそう！ユウはどこ？」

「あ・・・ユウは・・・。」

シヨウは真顔に変わった。

「も、もしかして？」

「寝てるよ☆」

「は？」

アサミは青い顔から赤い顔に変わった。

「もうシヨウ！！行って来る！！」

「あはは！いつものお返し☆」

シヨウも意地の悪い笑みをした。

アサミが出ていくと、二人きりになり、静かな空気が流れた。

「あ、姫！」

「な、なんだ!？」

「これ、お返しします！」

首にかけていたお守りを手にした。

「あ、ああ・・・。」

「この石が守ってくれました・・・。弾丸が、胸に当たったんですが、石がかばってくれたんです。」

「そ、そうか!それは良かった。じゃ、まだ持っているよ。」

「いいんですか?でも、姫さまのお守り・・・。」

「私のお守りは・・・お前だ・・・。」

「え・・・!!!??」

シヨウはチエの言葉に驚いたが・・・。

「お前は・・・ずっと私のそばにいてくれるんだろう?」

ショウはにっこり微笑み、

「はい……。俺が姫を守ります……。」

チエを、『女の子』として？

『姫』として守るの？

そんなのどっちだっていい。

あなたがそばにいてくれるなら……。

君がいてよかったよ（前書き）

君がいてよかったよ

次の日の朝。

「ラン！朝食はできてるか？」

「はい！少々お待ちください！」

「今日は、シヨウ様とご一緒に出かけられるのでしょうか？」

「ああ！」

朝食を食べ終え、白馬のところへ行こうとした。

そこへ、ユキコがチエを呼びとめた。

「チエ！ちょっといい？すぐすむから！」

「え？あ、ああ・・・。」

ユウサクの部屋に入った。

「なんだ？話って？」

「どうだ？吉峰との結婚。考えたか？」

ユウサクが単刀直入に言った。

「え・・・嫌・・・まだだ。」

「そうか・・・迷うならチエ、今日、吉峰の息子と会ってみないか？」

「そうよチエ、ケイゴくんって言うんだけど、なかなか優しい子だったわよ・・・。」

「でも、今日はシヨウと会う約束があるのだ・・・。」

「午前中だけだ。シヨウとは午後からにしてもらってくれ。」

「わ、わかった・・・。」

いつもとユウサクの表情が違っていているのに、チエは気づいた。ユウサクの戦争嫌いであることは、西条の全員が知っている。やはり、ユウサクはどちらかといえば、戦を避けてチエを嫁がすことを望んでいるのだろう。

西条西村。

「おーい！シヨウー！」

アサミが息をきらしてやって来た。

「なんだよアサミ・・・？」

「西条城に、吉峰が来たって！」

「ええ！？」

「ねえ！ちょっと様子見に行こうよ！」

「ええっ！？」

西条城。

「おはようございます。吉峰ケイゴです。」

優しい表情をして、笑顔がとても似合う、ショウ達と同年代の青年だ。」

吉峰村の住民も、ケイゴをとても好いている。

「それじゃ、庭でチエと話してきて!」

「はい……。行きましょう。姫君……。」

(ドキッ)

「え、ええ……。」

ケイゴの微笑みがショウによく似ていたので、チエの胸が少しときめいた。

西条城の庭は鹿おどしがあり、カコーン……という柔らかい音が響く。

「なあ……。ケイゴ……。」

「はい?」

笑みを浮かべて返事をした。

「(やっぱり似ている……。)」

「姫?」

「あ、いや……。私なんて……。そなたのところへ嫁いでも、なんの役にも立たぬ

ぞ。」

「そんなことはございません。あなたの素晴らしい噂は聞いております。」

動物とお仲がよろしいとか・・・。」

「え、ええ!？は、恥ずかしいな・・・。」

チエは顔を赤らめて、目を背けた。

「いいえ・・・私も動物が好きで、西条森に小さい頃から遊びに行っておりました。鳥と一緒に、歌っている、チエ姫を拝見したのです。」

「!」

歌とチエ姫に見惚れていて、声はかけることができなかったのです。が・・・それから、チエ姫に好意をもつようになったのです・・・。」

「ケイゴ・・・。」

「一目ぼれだったのです・・・。」

ケイゴは切ない微笑みを浮かべ、チエは言葉を失った。

そしてケイゴはチエに近づき、手をとって口づけた。

「ケ、ケイゴ・・・!」

ケイゴの口づけにチエの心臓がはねた。

「姫・・・私と結婚してください・・・。」

優しくチエを抱きしめていった。

「・・・！」

チエはあの時の記憶を思い出した。

シヨウに優しく、抱きしめられた、あの温かい感触。

しかし、何かが違う。チエの心の中は嵐になっていった。

「ランさん!! チエは!?! チエはどこ!?!」

アサミは息をきらしながらランに問いかける。

「アサミ様! チエ様ならお庭で、ケイゴ様といらっしゃるはずですが・・・。」

「ありがとうございます! シヨウ! 行くよ!!」

「お、おい!!」

「あ、アサミ様! お話中ですので・・・!」

アサミの耳にはもう何も聞いていなかった。
ただチエのことだけで頭がいっぱいだった。

「おいアサミ！なんでいきなりここへ来るんだ！？」

「あんた、チエのこと好きなんでしょう！？だったら、男として意地でもチエの結婚を食い止めないと！！」

「・・・！で、でも・・・。」

「あたしだって、戦は嫌よ！でも、チエが遠くに行って、会えなくなるのが嫌なの！！チエが結婚したら、もう会えなくなるんだよ！！そんなの嫌よ！！」

アサミの目には涙がいっぱい溜まっていた。

「アサミ・・・。」

「ケイゴ・・・！」

「チエの声だ！！行こう！！」

「・・・ああ！」

「姫は・・・私のことはお嫌いかな？」

ケイゴは悲しい顔をして尋ねた。

「そんなことはない。そなたの笑顔、すごく素敵で、いい方だと思った。」

チエは真剣に言った。ケイゴもその言葉に喜んだ。

「でも・・・兄が戦で亡くなっているんで、私がそなたのところへ嫁げば、父上や母上は寂しい思いをするのだ・・・。」

「姫・・・。」

シヨウやアサミは庭にたどり着き、チエ達の会話を聞いていた。

「それに・・・それに・・・。私は・・・西条の村が好きだし、大切な人がいるから・・・離れたくないのだ。」

チエの瞳はとても輝いていた。

シヨウ達は心を打たれた。

（姫・・・大切な人って・・・誰なのですか？）

シヨウとケイゴが同時に思ったことだった。

「そんなこと言われても、諦められません・・・。ますます好きになりました・・・。」

「ケ、ケイゴ!!」

ケイゴはチエの腕をつかんだ。

「あなたの気持ちを変えられるまで・・・絶対に諦めません。待ってますよ。姫。」

そうにつこり微笑んで、チエの頬にキスを落とした。

シヨウはその光景を見てショックを受けた。

どうしようもなく、やるせなかった。

しかし、アサミは・・・。

「シヨウ！あんた、絶対負けるな！！しんでも、チエを奪え！」

「ア、アサミ・・・。」

「失礼します。」

ケイゴ達は頭を深く垂れて吉峰村へ帰って行った。

「どう？チエ？ケイゴさん！なかなかいい感じの子だったでしょう？」

「・・・母上・・・私が、吉峰のところへ行っても・・・寂しくないのか？」

単刀直入に聞いた。

ユキコはその質問に少し驚いたが、にっこり微笑み、チエを抱きしめた。

「そりゃあ寂しいわよ・・・でもね、母さん。チエの晴れ姿、早く見たいし、吉峰さんのところでチエが幸せになってくれたら・・・母さん達、それで嬉しいのよ！」

「母上・・・。」

「それに、他の村のお殿様は、西条のお金目的で結婚をせまっているし、吉峰さんしか信じられないのよ！」

「な、なぜだ？父上の敵とは言ってなかったか？」

「吉峰ユウマさんは確かに気が難しいけど、本当は立派な人なのよ！敵っていうのは、噂☆本当は、仲がいいのよ！」

「でも、断ったら戦って言ってたじゃない・・・。」

「あ、それは本当なの・・・。冗談だと思うけどね・・・。それに、ケイゴくん、

かなりチエのこと好いているみたいよ！本気でね！」

「え・・・？」

「本気でチエのこと好きなのか、50個チエのいいところを言ってもらったけど、本当に言ったんだもの!!」

「ほ、本当?」

「冗談で言ったんだけど、本当に言っちゃったから、本気みたいね。」

「……。」

「まあ、ゆっくり考えなさい!時間はたくさんあるから!」

「……ああ。」

チエはユキコと別れると、また考え込んでしまった。

「チエ様!シヨウ様が、迎えに来られています。」

ミヤノが呼びに来た。

「え?あ、ああ!今から行く。」

仕度をあいて、白馬を連れて行った。

「シヨウ、待たせたな。行くぞ。」

「あ、はい！」

西条北村を通り過ぎる時、アサミが声をかけた。

「お二人さーん！！行ってらっしゃい」

意地悪な笑顔で見送り、二人は苦笑いしながら手を振った。

「（頑張れよ！シヨウ！）」

アサミは心の中でつぶやいた。

西条森。

「姫は、よくここへ本当に来られているんですね・・・。」

「ああ・・・来ては、おまえが戦で死なぬよう、祈っている・・・。」

「えっ！？ご、ご冗談を・・・！」

シヨウは顔を赤らめ、チエに背を向けた。

「おまえが、武士になってから、滅多にここへ一緒に来られなくな

ってしまった。私のが吉峰のところへ嫁げば、二度と来られなくなるだろう……。お前ともな……。」

「え……。？（ドキン）」

「……。もう、傷は大丈夫なのか？」

チエがショウの腕にふれ、傷の様子をうかがった。

「……。！だ、大丈夫です！」

「そうか、無理するなよ……。」

ショウはさらに赤くなったが、チエに問いだした。

「……。姫様はどうして私のことを心配なさってくださいるのですか？」

チエはショウの顔をゆっくりと見た。

「どうして……。ですか？」

ショウの真剣な顔……。

「それはな……。ショウ……。おまえのことが……。」

ショウの鼓動はどんどん大きくなり、チエの言葉が聞き取りにくくなってきた。

そして……

「大切だからだ・・・。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3306o/>

I love you...

2011年10月8日03時02分発行